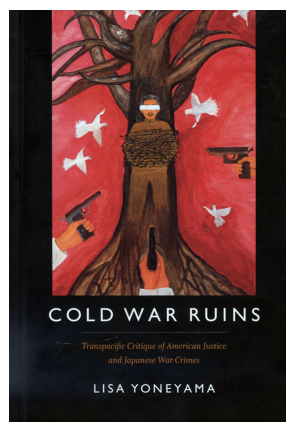


米山リサ

『冷戦の廃墟——アメリカの正義と日本の戦争犯罪について  
の太平洋を横断する批評』Lisa Yoneyama, *Cold War Ruins: Transpacific Critique of American Justice and  
Japanese War Crimes.*柴田 優呼<sup>ゆうこ</sup>

Duke University Press, 2016

アナール学派の「長期持続」という視座から、戦前の植民地期、戦後、そしてポスト冷戦期を考える本書の射程は長い。過去数十年にわたる北米や日本の学問成果を駆使して、多分野・多言語で展開された理論や批評、テクストに言及しつつ、重要な局面に焦点を当てる。冷戦体制、日米関係、ジェンダーと占領、帝国と国民国家などテーマは多岐にわたり、沖縄、憲法、従軍慰安婦、アジア系アメリカ人とアメリカ社会、原爆など問題群も多彩である。一冊の本がこれだけ多面的・多元的な事象に、これだけの深度と精緻さを備えた思考でもって斬り込むのを目撃する機会はあまりなく、本書は今後も幅広い学際的な領域で参照され、議論を先導していくだろう。

この本の醍醐味の一つは、戦後の日米体制を維持するために犧

牲にされ、利用されてきたものは何か、米山リサ氏が剔抉<sup>ていけつ</sup>していくその過程にある。氏が議論と検証の場とするのは、返還後も米軍基地が集中する沖縄であり（第一章）、米軍占領下の日本人女性解放神話であり（第二章）、日本の歴史修正主義者の言説と女性国際戦犯法廷であり（第三章）、日本による強制労働などに対する賠償を求めたカリフォルニアでの訴訟であり（第四章）、一九九五年、戦後五十年の節目に起きたアメリカのスミソニアン博物館の原爆展を巡る論争（第五章）である。

太平洋をまたがるこれらの事象に、九〇年代以降盛んになった国境を超えたリドレス、という観点から米山氏は接近する。日本語による前著『暴力・戦争・リドレス——多文化主義のポリティクス』（岩波書店、二〇〇三年）から引き続き、氏は議論の根底に

このリドレスの概念を据える。それは、歴史的なトラウマの補償を試み、マイノリティにされたり従属させられたり社会的な死をもたらされてきたことに対する是正を求める実践を意味する。

このリドレスの軌跡を追っていく中で、米山氏は多くの重要な指摘をする。アメリカにおいて日本の戦争犯罪を追及するアジア人またはアジア系アメリカ人のリドレスの動きは「日本の戦争犯罪のアメリカ化」ひいては「世界正義のアメリカ化」をもたらすが、彼らが行動を起こす背景には、冷戦下のアメリカ社会で人権回復を求める動きが封じ込められていたことも関係している。つまり冷戦の封じ込め戦略の対象は、共産勢力に限らなかったのだ。氏は、なぜアメリカの戦争犯罪はリドレスされないのかについても考察する。それは「アメリカにより自分は解放され、自分の受けた傷も癒され、社会復帰が可能になったのだ」という「解放とリハビリ（治癒と更正）の神話」が力を持っているためだ。アメリカの恩恵を受けた結果として現在の自分があるのだから、アメリカ側には何も債務はないのである。

刮目すべきは、そうした論点の理論化にとどまらず、小説やメディア報道、出版活動や裁判の行く末などの分析を通じて、リドレスの（不）可能性の実態が印象的に記述されることである。第一章で、沖縄の本土復帰前夜に芥川賞を受賞した大城立裕の『カ

クテル・パーティー』を取り上げ、登場人物の沖縄の女性が二重三重に封じ込められていくさまを浮き彫りにする。米兵にレイプされたにもかかわらず、暴行をされた後で米兵にけがをさせたとして、原告のみならず被告としても法廷に立たされるのだ。しかも物語中で彼女は自分の声を与えられず、最終的には両方の裁判での敗訴が予想される中、彼女の父親の声だけが前景化していく。だが封じ込められるのは彼女だけでない。この父親も本土から来た記者に、沖縄での日本軍の残虐行為を話せない。一方、登場人物の中には、日中戦争及び国共内戦の避難民である中国人男性もいる。戦争中日本人兵士に妻をレイプされた彼は、米軍の不正に口をつぐみ、沖縄の収奪に実質的に参加する。暴力の経験と記憶がこのように幾重にも絡まる。

第二章では、米軍占領下における日本人女性への参政権付与を取り上げ、これが戦後、アメリカは偉大で特別、という例外主義の思想強化に利用されてきたと論じる。アメリカの勝利と占領によつて日本人女性解放されたのだから、日本における米軍の軍事的プレゼンスも正当化されて当然、という解放のレトリックがこうして確立される。同時に、アメリカの戦争も「正しい戦争」「正義の戦争」だと正当化される。現実にはアメリカは新興植民地主義勢力として、ヨーロッパの植民地からの解放を旗印にアジアの覇権を日本と競っていたのだが、そうした戦前からの帝国とし

ての歴史は捨象される。その後イラク侵攻の際にも利用されたこの解放のレトリックは、アメリカの冷戦期の地政的想像力の鍵となった。

これと軌を一にして、白人中産階級のアメリカ人女性を近代の進歩の担い手とする冷戦期フェミニズムが力を得る。実際には日本人女性に劣らず、異性愛主義のブルジョワ家庭の内に閉じ込められていたのだが、「人種化された植民地の女性」との対比によって、アメリカ白人女性は正統的なジェンダーの正義を代表することになる。その一方で、日本人女性がこの「人種化された植民地の女性」として位置づけられる様子も、アメリカの戦時中の報道を追う過程で米山氏は鮮やかに描き出す。開戦当初は、アメリカ人女性を戦争協力に駆り立てる意図もあり、アメリカの新聞は日本人女性について、日本人男性に負けず軍国主義的で近代的だと書き立てていたのが、戦争終結間近になると、日本人男性に奴隷扱いされてきた弱々しい存在だと描き始める。

第三章では、アメリカの冷戦体制のさらに核心に踏み込み、日米関係との相関性を論じる。九〇年代以降の日本の保守派の修正主義者は、二十世紀半ばの冷戦期のアメリカ思想を補完する役割を果たした、と米山氏は指摘する。そうした補完作業によって、アメリカの従属国家としての非対称な関係維持を画したのである。ここで氏が注目するのが、愛国心とジェンダーの接統性である。

修正主義者が特に批判したのは従軍慰安婦問題とジェンダーフリー教育だったが、それは国家の歴史を、誇りと名誉という男性性の問題に置き換えるものでもあった。

従属国家になる選択と男性性と冷戦——この配置を考えるにあたり、米山氏はアジア系アメリカ人の男性性の問題を参照する。アメリカ社会におけるモデル・マイノリティとして振舞うことが期待される彼らは、まさにその役割をうまく果たすことにより、アメリカのリベリズムに潜在する人種差別も実質的に受け入れることになる。だがそこでは、アジア系男性の性を規範から外れたものとみなす差別的イメージも構造化されているため、アメリカ社会に受け入れられる資格を得るのと引き換えに、彼らは傷ついた自己を自らの内に抑圧する。そうやって顕現するのが男性ヒステリーである。

九〇年代はポスト冷戦初期で、国際情勢に対する不安が醸成された時期だった。朝鮮半島の分断が続くなど東アジアでは現実冷戦が継続中であり、ポスト冷戦という言葉はもともとヨーロッパの地域主義に基づくものである。かといって東アジアが「冷戦後」の不安と無縁だったわけではない。つまりそうしたポスト冷戦の不透明さの中で、アメリカの従属国家でい続けるという選択は、アメリカの「モデル・マイノリティ国家」でい続けることでもあり、自己抑圧とその結果としての男性ヒステリーを引き

受けることを伴う。そもそも戦後日本の軍事国家から平和国家への歩みは女性化の過程とも言え、だからこそ修正主義者にとって「普通の国になる」という考えは、毀損<sup>きそん</sup>された男性性を回復するという寓意を含む機制として、魅力的に映るのである。

第四章と第五章の一部でなされる議論は前掲書にも登場するが、興味深いのは、アジア人やアジア系アメリカ人のアメリカにおけるリドレスは、日本の戦争犯罪に対するものであっても、アメリカという国家と再交渉を経ざるを得ない、という米山氏の指摘である。リドレスの過程で、国家が定めた正義と言説を正統的なものとし、アメリカに同化する手順を踏まざるを得ないからだ。だが氏は、彼らが支配的な言説に完全に親和することはないと考える。そして、もし彼らがアメリカの帝国主義的暴力と人種主義をも<sup>そじよう</sup>組上に載せることができれば、多元的な記憶を捨てることなく、新しい公共性を切り開く可能性があると期待する。

以上のように、日本やアジアの戦後とポスト冷戦を考えるには、アメリカとの関係性を考慮に入れざるを得ないことを本書は示す。第五章のスミソニアン博物館の原爆展論争においても、日米が太平洋を隔てて複雑に絡み合うさまが描かれる。例えば、原爆による人的被害の展示に反対するアメリカの愛国主義者が口にする論理が、日本のリベラル派がナショナリズム批判として行ってきた日本の植民地支配と戦争加害に対する隠蔽や忘却への批判と重な

り合う。こうした絡まり合う関係性を長期持続的に分析する本書は、日本研究、アメリカ人研究、アジア系アメリカ研究、占領研究、冷戦研究、正義の研究などの領域横断の実践書でもある。

ポスト冷戦後のリドレスは地政学的に考えるべき、という米山氏の分析に不足があるとすれば、東アジアで日本に植民地支配された人々、とりわけ韓国での韓国人らの関わりを検証することだろう。慰安婦についての朴裕河<sup>パクユハ</sup>氏の著書を巡る訴訟にみられるように、同国内の論争の磁場はアメリカまたは日米間の分析だけではつかめない。現在、東アジアの政治は新しい局面に入っている。中国の経済・軍事両面での大国化、北朝鮮の核開発、韓国経済の躍進など、日本がアジアで、またアメリカが世界で、圧倒的な存在感を持っていた頃の世界観では対処できなくなってきた。アメリカの民主主義の変容も、この地域を揺るがす。だが、米山氏が本書で活写した日米の基本的な関係性と構造は、こうした状況変化の中で解体どころかさらに深化しようとしているようである。